

010_銀河の音と行動心理学_音の重要性_倍音関係_要点

銀河の音と行動心理学（続き）

13の月の暦と音（続き）一音の重要性・倍音関係・共和関係

● 島袋みづえ氏の例から見る「倍音関係」

前パートに続いて、具体的な人物を例に音の組み合わせが解説されています。島袋みづえ氏はKIN156・音13、2月生まれで誕生日の音は8です。8と13では8が先（間隔4つ）となり、「8が先に来る＝空気やエネルギーを敏感に感じ取ること」が行動の入り口となり、「13で着地する＝長期的にオリジナル性を持って物事をまとめる」という行動様式を持っています。長年の付き合いの中で感受性が強く、涙される場面も多いというエピソードが添えられています。

ここで重要な概念として「倍音関係」が紹介されています。島袋氏は8と13を自分の中に持っていますが、 $3 \cdot 8 \cdot 13$ は「5番違い」のグループであり、これが倍音関係に当たります。倍音関係とは、自分の中にある2つの音が5番（または10番）違いにある組み合わせのことです。

倍音関係の一覧

倍音関係に当たる組み合わせは次の通りです。 $3 \cdot 8 \cdot 13$ のグループ、 $2 \cdot 7 \cdot 12$ のグループ、 $4 \cdot 9$ のグループ、 $5 \cdot 10$ のグループです。この中でも「5と10」が最強の倍音関係とされています。

倍音関係が自分の中にある人（銀河の音と誕生日の音がこの関係）の最大の特徴は、自分でモチベーションを上げられる「自家発電」型であるということです。落ち込んでも自分でエンジンをかけ直せるため、子育てにおいてもあまり心配いらないタイプだといわれています。スタッフの鈴木由紀子氏（音11・誕生日の音1）がいつも元気に見える理由も、1と11が倍音関係にあり、自家発電できているからだといわれています。

● 共和関係（4番違い）とその意味

倍音関係と並ぶもう一つの重要な関係性として「共和関係（4番違い）」が紹介されています。共和関係のグループは次の通りです。 $1 \cdot 5 \cdot 9 \cdot 13$ 、 $2 \cdot 6 \cdot 10$ 、 $3 \cdot 7 \cdot 11$ 、 $4 \cdot 8 \cdot 12$ という4つのグループがあります。

1・5・9・13：目的志向グループ

このグループの音が自分の中に2つある人は、目的をはっきりさせることがとても大切です。単純明快なことが好きで、複雑な話より明確な目標の提示が効果的です。子供であれば「毎回ディズニーランド」という一貫した目標で十分動機づけられます。

2・6・10：新しいもの好きグループ

このグループの音を2つ持つ人は、新しい情報・場所・体験に心が動きます。同じ目標や報酬では飽きやすく、「今回はUSJにしてほしい」など目先を変えることが有効です。逆に言えば、伝統や歴史のあるものに関心が薄くなりやすいという面もあります。

3・7・11：奉仕と打算のグループ

このグループは奉仕の気持ちが強い半面、打算的な側面も持ち合わせています。経済観念が強く金銭で破綻しにくいという特徴もあります。ここで、青い鷲の紋章は「断れない」性質を持つことが多いというエピソードも語られています。断れないことが金銭的な破綻を招きやすいため、その場で答えを出さず「少し時間をください」という習慣を持つことが一つの対策として勧められています。3・7・11は打算と奉仕のせめぎ合いが起きやすいですが、少しだけ奉仕の気持ちを優先させると良いことが起きやすいとされています。

4・8・12：心の繋がり重視グループ

このグループの音を2つ持つ人は、心の繋がりを必要以上に求める傾向があります。法人会員の社長（音8）と担当窓口（音1）のエピソードが紹介されています。会議でも目標設定より心の繋がりを確認したがる音8の社長と、目的中心に進めたい音1の担当者とは会議スタイルが大きく違い、「共和関係を説明してほしい」という依頼に繋がったというユーモアある実例です。4が回ってきた年は人間関係が苦しかった一方、人の痛みがよくわかりカウンセリングに向いているという側面もあったと語られています。

● 音の組み合わせのさらに深い読み方

同じ音が揃う場合

銀河の音と誕生日の音が同じ場合（例：越川氏の4の4）、自分の中で動きがなく、放っておくとそのままになりやすいという特性があります。誰かに押ししてもらったり引っ張ってもらうことが必要になる場合があります。越川氏自身が「じっと本を読んでいるのが好き」という一面を持つことがその例として挙げられています。

音が繋がっている場合

将棋の羽生善治氏（音3・誕生日の音2）、囲碁の井山裕太氏（音12・誕生日の音13）のように、音が隣接・近接している場合は動きはあるが幅が狭く、人が入り込む余地が少ないため、よっぽど納得しないと人の言うことを聞かないという特性があります。ただし自己肯定感が高くなりやすく、自分の感覚を信じられるため活躍しやすい法則があります。うまくいかない人は自己肯定感を高めることが突破口になるとされています。

13と1の組み合わせ

外見は柔和でニコニコしているように見えますが、13と1は隙間なく繋がっているため、信念が非常に強く、安易に人の言うことを聞かない最も頑固なパターンの一つです。説得するのが最も大変な組み合わせとして紹介されています。

7月25日生まれの特殊性

7月25日は「時間を外した日」として0に相当します。この日に生まれた人は誕生日の音がゼロとなるため、どこにでも入っていける特性がある一方、年回りを見る際は銀河の音（KINナンバーの音）のみが基軸となります。

踊り場の年

誕生日の音と年回りKINの銀河の音が一致する年は「踊り場」の状態です。螺旋状の成長を続ける中で、その年は整理しながら次へのステップを準備する年として捉えることが勧められています。

■ マヤ暦と心理学的アプローチについて

生年月日から入るマヤ暦は「占い」と決めつけられることが多いという課題が述べられています。それに対して、心理学的な要素を意識的に強めることで、より広い層に届けられる伝え方ができるという考え方が語られています。シニア・スーパーを中心にお互いの組み合わせを検討し合う勉強会・お茶会を開催して、音の理解を

深めていくことが強く勧められています。

■ 新しいグループを立ち上げた4名について

講座の最後に、研究会から独立して新しいグループを立ち上げた4名（木田氏・安永氏・本川氏・スーパーの安倍氏）に関連した質問への回答が述べられています。

「向こうのグループで資格を取りつつ、こちらでもアドバイザーとして活動することは可能か」という問いに対して、学びの自由は妨げないが、アドバイザーとして活動する場はどちらか一方に明確に決めなければならないという方針が明示されました。

その理由として、両グループでは内容が異なること、および責任体制の問題が挙げられています。研究会では顧問弁護士・特許事務所との連携により、著作権・法的問題の処理体制が整備されており、認定アドバイザーが問題を抱えた際には研究会が全面的にサポートできる体制にあります。一方、新しいグループはそちらで独自にしっかり準備されているはずであり、互いに対して「両方掛け持ち」することは失礼に当たるという観点から、活動の場は一本化するよう求められています。

研究会としては今後もシニア制度をそのまま維持し、アドバイザーの活躍の場を広げるための教材整備（有料動画コンテンツの準備なども含む）を充実させていく方針が示され、長時間の研修が締めくくられています。
